

東関紀行

作者: 不詳

成立: 仁治3年(1242)



解題

Keyword

- 鎌倉
- 東海道
- 鎌倉大仏
- 「十六夜日記」
- 「更級日記」
- 中世三大紀行

『海道記』(#14)から約20年後、初老の隠遁の士が著した京都から鎌倉へ東海道を下った旅の紀行文。「東関」は関所の東を意味し、ここでは関東、具体的には鎌倉を指すとされる。

■ 成立

本文の記述から旅行は仁治3年(1242)秋のことであり、執筆時期についてはその直後という説が有力である。『海道記』同様、鴨長明、源光行、源親行らが作者とされてきたが、いずれも史実に合わず、本書も作者は不詳である。

■ 内容

和歌を挿入した和漢混淆文という形式は『海道記』と共通であるが、長さはその半分程度、作者の感想部分が少なく、紀行に徹している。8月10日過ぎに京都を立ち、2週間弱で鎌倉に到着した。近江、美濃から尾張へ出た点、また駿河から箱根山を越えて相模に入った点が、『海道記』の旅程と異なる。神奈川県域では、芦ノ湖、湯本の様子が描かれ、大磯、もろこしが原(平塚市)、江の島の名が見える。鎌倉には2か月滞在したが、簡略な記事しか残していない。和賀江島から三浦半島に足を伸ばし、鶴岡八幡宮・永福寺・勝長寿院に参拝している。注目されるのは湯井の浦(由比ガ浜)に建造中の阿弥陀仏木像の記述で、謎の多い鎌倉大仏の創建に関する史料となっている。10月23日、帰京のため鎌倉を立つところで結尾となる。

■ 諸本

善本といえる古写本が伝来せず、『扶桑拾葉集』巻11の写本、正保5年(1648)の版本、群書類従本などが代表的なものであるが、大きな異同はない。書名は『東関紀行』のほか、『鴨長明道の記』、『鴨長明海道記』等がある。

■ 『十六夜日記』と『更級日記』

『東関紀行』の旅から37年後の弘安2年(1279)、阿仏(あぶつ)という老尼僧が同じ道筋を京から鎌倉に下った。この道中と鎌倉滞在の日々を綴ったのが『十六夜日記(いざよいにっき)』であり、『海道記』、『東関紀行』とともに中世三大紀行とされる。また、時代は200年以上前の平安中期にさかのぼるが、菅原孝標女『更級日記(さらしなになっき)』の初めには、上総から京に上る旅が短く記され、もろこしが原と足柄山が印象的に描かれている。



史料本文を読む

<翻刻本>

- ◆ 「東関紀行」(『東関紀行・海道記』玉井幸助校訂 岩波書店 1935(岩波文庫) [K99/40])
- ◆ 「東関紀行」(『群書類従』第18輯 紀行部 巻331 [K08/17])
- 『東関紀行：本文及び総索引』熊本女子大学国語学研究室編 笠間書院 1977 [915.46/2]

<注釈本>

- ◆ 「東関紀行」玉井幸助校註(『海道記・東関紀行・十六夜日記』朝日新聞社 1951(日本古典全書) [K99/26])
- ◆ 「東関紀行」大曾根章介・久保田淳校注(『新日本古典文学全集51』岩波書店 1990 [918/20/51]) (索引あり)
- 『東関紀行全釈』武田孝著 笠間書院 1993(笠間注釈叢刊16) [915.46BB/101] (索引あり)
- ◆ 「東関紀行」長崎健校注・訳(『新編日本古典文学全集48』小学館 1994 [K99/63]) (索引あり)



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆ 「中世の紀行と『おくのほそ道』」(『中世文学試論』木藤才蔵著 明治書院 1984 [910.24/50])
- ※ 『東関紀行』と『おくのほそ道』の関係について論及